

琉球大学学術リポジトリ

《技術・家庭科(家庭分野)》学びをつなげよりよい生活を創造する生徒の育成(2年次):
アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた生活文化の継承・発信の授業実践を通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2020-06-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上間, 江利子, 田原, 美和, 土屋, 善和 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45994

学びをつなげよりよい生活を創造する生徒の育成（2年次）

—アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた生活文化の継承・発信の授業実践を通して—

上間江利子* 田原美和** 土屋善和**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定の理由

1 社会的背景から

これからの社会は、予測が難しく変化の激しい時代と言われている。生徒達がこれからの社会をよりよく生きていくためには、思考スキルを使って問題解決していく力が求められている。本校研究テーマ21世紀型思考力を、社会の変化に対応し、21世紀をよりよく生きる力を支える思考力と本教科では捉え、研究を進めていく。教育課程部会家庭、技術・家庭ワーキンググループ資料¹⁾家庭科の今後の在り方の中で、生活上の課題を設定し、解決方法を考え計画を立てて実践するといった問題解決的な学習が効果的に行われていないことを課題として挙げている。そこで、「将来を見通した生活設計に必要な生活の課題についての内容を充実する必要がある。」²⁾とし、今後の家庭科の改善の視点案として

「家庭科で育成する資質・能力」³⁾が示された(図1)。

- 生活を科学的に理解し、生涯を通して安心・安全・健康的な生活を営む実践力を育成する
- 生活の課題を解決するために、様々な年代の人と協働し、コミュニケーションして主体的に参画する力
- ◆少子高齢化に対応する力
(子育て理解、高齢者の理解、生涯生活設計能力)
- ◆生活課題を解決するために必要な社会参画力・コミュニケーション能力(地域コミュニティを構築)
- ◆持続可能な社会を構築する力
(消費・環境に配慮したライフスタイルの確立)
- ◆グローバル化に対応する力
(衣食住の生活文化の継承・発信)

図1 家庭科で育成する資質・能力³⁾

家庭科は生活に関わる教科であり、社会の変化への対応を踏まえた指導が今後より一層求められる。「家庭科で育成する資質・能力」³⁾(図1)を目指し、本教科の授業実践を考えていきたい。

2 これまでの研究から

昨年度から本校家庭科は、「学びをつなげよりよい生活を創造する生徒の育成」について研究を進めてきた。1年次の成果と課題は次の通りである。

(1) 成果

- ・アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた食生活を題材とした学習を計画し、実践することができた。
- ・知識構成型ジグソー法の食生活分野の授業実践ができた。また、公立の家庭科教諭と協力し、エキスパート資料の検討、検証授業を行うことができた。
- ・振り返りを活用することで、生徒の学びのプロセス、理解、気づきが明確になり、授業づくりに活かすことができた。

(2) 課題

- ・知識構成型ジグソー法が普通教室での実践であったため、参観者の先生方から「家庭科室で行えと取り組みやすい」との提案があった。家庭科室で実践できる座席の検討を行っていく。
- ・生徒の思考の深まり、学びのプロセスがみとれるワークシートの工夫を行い、教師と生徒が学びのプロセスを共有することで、より詳細なみとりにつなげていく。

3 生徒の実態から

昨年度、1 学年の「和食を基本とした一汁三菜の献立を考えよう」の学習で、和食は 2013 年にユネスコ無形文化遺産に登録され世界的に注目されていることや、日本の伝統的な食文化であるということは知っていても、『このメニューは和食?』『みそ汁とすまし汁の違いは?』など、和食の理解はそれぞれに異なり個人差があった。献立学習は個人からペア、グループへとつなげ、作成した献立をもとに調理実習を行うというゴールを設定したことで、主体的に取り組む姿が見られた。しかし、参考にした教科書の献立の食材が初めて知るものであったりすると、『山椒ってなに?』『どういうもの?』など教師への質問が多かった。そこで、家庭での実践へつなげるためにも教師が答えるのではなく、生徒自らで知識を獲得していく力を身に付けさせたいと考え、タブレットをペアで 1 台割り当て献立作成に取り組ませたり、図書館の活用を行った。

生徒達は日本に居ながら、様々な国の料理を食べることができる環境にあり、「和食」「洋食」の違いを意識する機会も少ない。また、和食について自信を持って説明できる生徒も少ない。大人でも「和食」についての理解は曖昧で説明できる人は少ないとも言われているが、生活文化の継承・発信は家庭科で育成する資質・能力の一つであり、大切であると考え。

そこで、今年度は日本の生活文化の継承・発信を題材とし、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業実践を研究していく。自国の生活文化の良さに対する理解を深め、自身の生活に生かし継承・発信できる生徒の育成を目指す。

II 本研究の目的

本研究の目的は、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた家庭科における生活文化の継承・発信の授業実践を通して、日本人の生活事象の見方・考え方を理解し、生活文化を多面的・多角的に捉え、良さに気づき主体的に継承・発信しようとする生徒を育成することにある。

III 目指す生徒像

1 よりよい生活を目指し、主体的に学び、生活を工

夫し創造できる生徒。

2 日本の生活文化を多面的・多角的に捉え、良さに気づくことができる生徒。

IV 研究内容

1 家庭科における思考力・判断力・表現力等

家庭科では「生活を工夫し創造する能力」が「思考力・判断力・表現力等」にあたり、教育課程部会資料⁴⁾の中で、3つの能力をこれからの生活を展望して、よりよい生活を目指して課題を解決し、生活の中で活用する能力とし、次のように示されている(図2)。

思考力・判断力・表現力等	①様々な生活事象について他の生活事象と関連付け、批判的に検討し、総合的に考察する力
	②家族・家庭や地域における問題を課題として把握し、解決策を構想し、評価・計画する力
	③実習や観察・実験、調査、交流活動等の結果について、根拠や理由を明確にして論理的に説明したり、発表したりする力
	④他者の意見を取り入れたり、自分の意見を主張したりして意見交流する力

図2 家庭分野における思考力・判断力・表現力等⁴⁾

「③根拠や理由を明確にして論理的に説明したり、発表したりする力」については、昨年度の研究実践、食生活の知識構成型ジグソー法の中で取り組んだ。学校全体で育成に取り組んでいる能力でもある。「④他者の意見を取り入れたり、自分の意見を主張したりして意見交流する力」については、よりよい意思決定力にもつながる。可能な限り毎回の授業の中で、はぐくんできよう意見交流の場の設定を行っている。そこで、今年度は「①様々な生活事象について他の生活事象と関連付け、批判的に検討し、総合的に考察する力」の育成を丁寧に取り組んでいくことで、本教科の研究テーマ「学びをつなげよりよい生活を創造する生徒の育成」の実現に迫れるものと考えた。

様々な生活事象について捉え考える場面で、多くの生徒は、表面的な部分、主だった部分での解釈や知識に頼りがちな面がある。『なぜそうなのか?』『理由は?』と聞いてみると『教科書に書いてあったから』『そう習

ったから』『そう思うから』と回答する生徒も多いライフスタイルが多様化し、答えは一つではないことや多様な考えや意見があつていいことをベースに授業を行っているが、「自分の考えであれば何でもよいということではない」課題解決に向けた意見交流の場面で『いろんな意見があつていいんだよ』と教師は声かけを行うが、その根拠となるのが「生活の営みに係る見方・考え方」である。以上のことを踏まえて本研究では、よりよい生活を工夫し創造できるよう、「生活の営みに係る見方・考え方」を通して思考力・判断力・表現力等をはぐくむ家庭科の授業を考えていきたい。

2 アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた生活文化の継承・発信の授業デザイン

「生活を工夫し創造する能力」をみとる場面で、家庭科の学びを自身の生活につなげ、工夫を考えていくが、生徒それぞれの生活は異なるので、多様な生活の工夫を考えて欲しいが、家庭科の学び以上に考えを広げることができない生徒も多い。その要因として部活動や塾通いで家庭で過ごす時間が減少していることにより、生徒自身の生活にうまく置き換えられていない点が挙げられる。生活の工夫の仕方について、具体的な例を提示し解を示してしまうと考えが深まらないため、生徒自身に解を導き出させる手立てを講じる必要がある。

(1) 多様な生活の工夫につなげる茶道体験

「一つの茶碗に点てたお茶を、一緒にいる人と味わい、楽しみ、すばらしい時間を過ごすために心を配ったり、工夫したりするのが茶道だと言われている。」⁽⁵⁾ また日本の四季に合わせた暮らし方の工夫や、生活を楽しむ知恵が継承されている。「茶道」は生活の工夫を考えるヒントにつながると考え家庭科で教材化することにした。茶道を通して目の前でやっている所作一つの意味を理解することは、生活事象を多面的・多角的に捉えることにつながると考える。茶道で使う茶碗や、道具の一つ一つにストーリーがあり、作り手の職人の方々も伝統を受け継いできている。日々の生活は、毎日繰り返されているため、一つ一つの生活行動を、深く考えて行うことは少ないが、茶道を通して日本人の生活事象の見方・考え方を知り、生活事象の背景まで考えを広げ、多面的・多角的に自身の生活を捉えることができるよう茶道と家庭科の学び、生徒の生活をつなげていきたい。

(2) 家庭科で取り組む茶道の教材化

生徒が伝統文化を継承していこうと主体的になるには、文化の良さに気づいた時であると考え。日本の生活文化の良さに気づくことができるための教材研究を行った。日本の代表的な伝統文化の一つである茶道の中には、現代にもつながる生活の工夫が多くある。茶道を通して、日本の生活文化の良さに気づくことができるアプローチを考えた。千利休は、お茶の真意を伝えるために七則（七つの教え）⁽⁶⁾を残した（図3）。

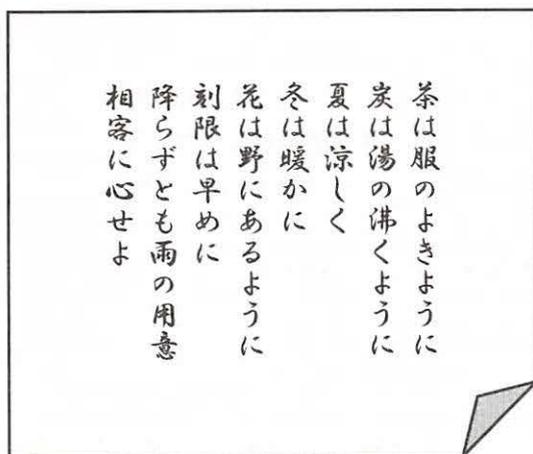


図3 利休七則（七つの教え）⁽⁶⁾

「おいしいお茶を点てるために、心を込めよう」「お湯は沸かすだけでなく、よい加減に調節しよう」「目や心でも涼しさや温かさを感じられる工夫をしよう」「お茶席の花はできるだけ自然のままの姿で取り入れよう」「限られた時間を大切にするために、心にゆとりを持って行動しよう」「あわてずにどんなことにも対応できる準備と心構えをしておこう」「お互いが相手のことを思いながら、一緒にお茶を楽しもう」。それらは千利休が大切にした言葉と言われている⁽⁷⁾。

また「和敬静寂」という一つ一つが茶道の心を表している言葉がある（図4）⁽⁸⁾。

和（お互いに相手のことを思いやって仲良くする。）
 敬（お互いを敬い合う。大切にしよう。）
 清（清らかという意味。見た目の清潔さだけでなく、心の中も清らかであるということ。）
 寂（どんな時にも動じない。何が起こってもいつも通りいられる心がけが大切。）

図4 和敬静寂（わけいせいじゃく）⁽⁸⁾

茶道の授業を通して、生徒に気づかせたいことは次の3点である。

- ・昔の日本人の生活は、現代とは異なり生活用品も限られていた中で、暮らしを楽しみ、快適に暮らすための工夫をしていたということ。
- ・利休七則にあるように客をもてなすには、手間、時間がかかるが、お茶席を楽しむには必要であること。
- ・現代人の意思決定に係る選択基準に「効率化」「時間短縮」が優先される傾向にある。古くから受け継がれてきている伝統食や和食のだしを使った料理など、手間がかかると敬遠されがちであるが、良さを知り目的や場に応じた考えをしていくこと。

それらに気づくことで、受け継がれてきている文化を大事にしていこうという心情が育つと考える。本校の研究テーマ「21世紀型思考力の育成していくためにも、茶道を通した生活文化の継承に関する新たな視点、気づきは必要なことである」と考える。

(3) 知識構成型ジグソー法の活用

知識構成型ジグソー法⁹⁰⁾は、CoREF(東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構)の開発した協調的な学びを引き起こすアクティブ・ラーニング型の学習形態である。本校では、平成25年度から27年度までの3年間、「未来を切り拓く対話からの学び-協調学習による個を生かす授業づくり-」をテーマに全教科で知識構成型ジグソー法を取り入れた授業づくりを行ってきた。家庭科の成果として「知識構成型ジグソー法を題材の導入部分で取り入れることで、題材への興味を高めることにつながる」「他教科との関連性持たせた視野の広い課題に取り組みやすく有効であった」⁹¹⁾ことを引き継ぎ、昨年度も食生活の題材で知識構成型ジグソー法の授業実践を行った。「問い」「エキスパート資料」を工夫することで「主体的」「対話的」「深い学び」へとつながるということが検証できた。今年度も生活文化の継承・発信の題材において生活文化を多面的・多角的に捉えるためには効果的であることから、知識構成型ジグソー法を取り入れていく。

①問いの工夫

日本の伝統的な「衣」「食」「住」の生活文化の良さとは

エキスパート資料をもとに、日本の伝統的な生活文化の良さについて考え、話し合うことによって日本人の生活事象の見方・考え方に理解を深め、生活文化を多面的・多角的に捉えることができ、主体的に継承・発信していこうとするのではないかと考え問いを設定

した。そしてこの問いに迫ることで生徒は、主体的に生活文化を継承・発信していこうとするのではないかと考えた。

②エキスパート資料の工夫

授業計画の段階では、茶道を通した衣食住に関するエキスパート資料を作成する予定であったが、ワークシートの授業感想や意識調査から、生徒達はお茶会の体験を通して、さらに「和食」「和菓子」「着物」など日本の伝統文化についての学びを希望していることが分かった。そこで、生徒の興味・関心と家庭科の資質・能力の育成の視点から、エキスパート資料を「衣生活」「食生活」「住生活」「茶の心」の4つに設定し、さらに公立中学校の家庭科教諭3名と協力しながら内容の精選を行った。エキスパート資料の中から、日本の生活文化の良さを見つけ出し、エキスパート活動を通して日本の生活文化についての理解が深まっていくよう工夫を行った。

エキスパートA

『日本の伝統的な衣生活』

- ・日本の伝統的な衣服「和服」
- ・お茶会の装いはTPOを考えて
- ・着物の種類(染め、織り)
- ・季節をあらわすかさね色目

☆伝統的な衣生活のよさについて考え、継承していくにはどう行動していけばよいか班で話し合おう！

エキスパートB

『日本の伝統的な食生活』

- ・「和食」の未来
- ・茶の味を引き立てる四季折々の美しい和菓子

☆伝統的な食生活のよさについて考え、継承していくにはどう行動していけばよいか班で話し合おう！

エキスパートC

『日本の伝統的な住生活』

- ・伝統的な住まい
- ・日本間のはじまり書院造り
- ・茶室でのマナー
- ・土足で家に上がらない習慣
- ・庭はいちばん身近な自然

☆伝統的な住生活のよさについて考え、継承していくにはどう行動していけばよいか班で話し合おう！

エキスパートD

『茶のこころ世界へ 100年後の皆さんへ』

・茶道家千家大宗匠の千玄室さん

メッセージ100年後の皆さんへ

☆日本文化の継承・創造について千さんはどう考えているだろうか千さんのメッセージを参考に班で話し合おう！

3 一枚ポートフォリオ評価法

一枚ポートフォリオ評価法 (OPPA: One Page Portfolio Assessment) ¹²⁾は、堀 (2013) によって提唱された評価法である。本校でも理科や社会科で取り入れており、家庭科も今年度より取り入れ、研究を深めていきたい。

①OPPA の定義

一枚の紙の上に単元や学習内容のまとまりを単位として、生徒が授業の中で最も大切だと思ったことをまとめたシート (OPP シート) を用い、記述内容を比較・分析することで、概念変化や学びの深まりを知ることができる。一つの方法で学習者と授業者の双方が活用できる評価方法として提案されたものである。図5は本題材で使用した OPP シートである。

②OPPA の原則

OPPA は、OPP シートを使って点数化したり、ランクづけをしない。その理由として堀は、次のように述べている。「第一は、学習者が学習した内容に関する実態を可能な限りの確に把握したいからである。学習内容を点数化したり、ランクづけすると、学習者は想定した枠の中で活動しがちになる。第二は、学習者はわれわれの想定外の可能性をもっているからである。想定された最もよい状態が存在し、それとの比較による考え方である。学習者はそれを超えるかもしれない (一部省略)。第三は、評価は学習者の資質・能力を育成することを重視しているからである。資質・能力の育成にも、もちろんランクは存在する。しかし、まず学習者の資質・能力の育成を可能にするためには、とりわけ一人ひとりを的確にみとる必要があるからである。まず、そこを出発点にすると、点数化やランクづけという考え方は適切に欠けると考えられる。」¹²⁾

③OPP シートの自己評価によるメタ認知する資質・能力の育成

生徒自身が自らの学び (思考や認知過程の内化・内省・外化) の軌跡を自己評価することでメタ認知する資質・能力を高めていくことにつながるとされている。

4 パフォーマンス評価・課題

西岡 (2016) ¹³⁾はアクティブ・ラーニングの充実を図るためにも、資質・能力を育てるパフォーマンス課題を教科において取り入れることを提案している。

①パフォーマンス評価

・知識やスキルを使いこなす (活用・応用・総合する) ことを求められるような評価方法。

②パフォーマンス課題

・様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求めるような複雑な課題。
・具体的には、論説文やレポート、展示物といった完成作品や、スピーチやプレゼンテーション、実験の実施といった実演 (狭義のパフォーマンス) を評価する課題。

③パフォーマンス課題のシナリオに織り込む6要素

- ①何が目的 (GOAL) か? ② (学習者が担う) 役割は何か?
- ③誰が相手か? ④想定される状況は?
- ⑤生み出すべき完成作品・パフォーマンスは?
- ⑥評価の観点 西岡加名志編著「資質・能力を育てるパフォーマンス評価」より

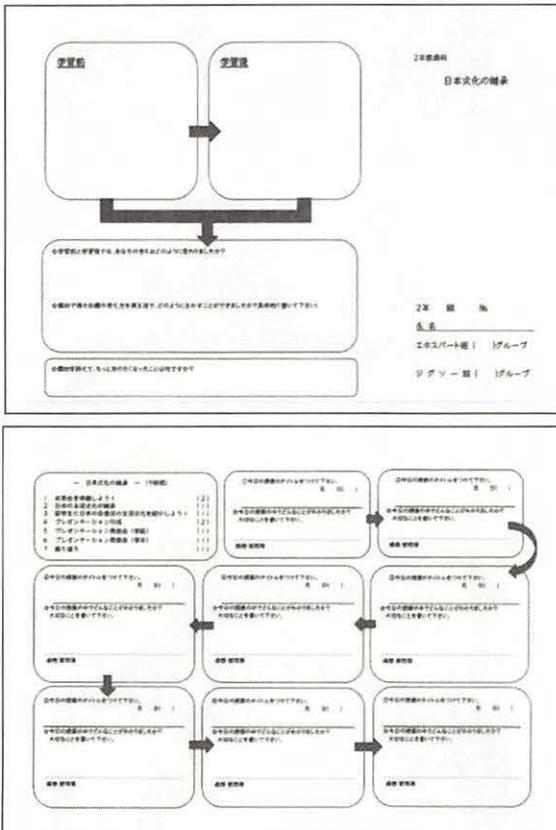


図5 生活文化の継承・発信のOPPシート

上記の6要素を踏まえ、本題材におけるパフォーマンス課題を設定した。

外国から来た留学生KENに「日本の伝統的な衣食住の生活文化について紹介して欲しい」とお願いされました。日本の衣生活、食生活、住生活について、あなたはどのように紹介しますか？パワーポイント5枚～8以内を作成しプレゼンテーションしましょう！

V 授業実践

1 2学年実践事例

(1) 題材名 日本の生活文化の継承・発信

(2) 題材の目標

- ・日本の生活文化を多面的・多角的に捉え、よさに気づくことができる。
- ・日本人の生活事象の見方・考え方を知り、よりよい生活を目指し、生活を工夫し創造できる。

(3) 本実践の目的

家庭科で育成する資質・能力の一つとして、グローバル化に対応する力がある。本題材は新学習指導要領（平成29年告示）¹³「B衣食住の生活」(3)(4)(6)で構成されている。そこで本実践の目的は、日本の生活文化の継承・発信の授業実践を通して、日本人の生活事象の見方・考え方を知り、自国の生活文化の良さを多面的・多角的に捉え、主体的に継承・発信しようとする生徒を育成することである。

(4) 題材計画

	学習内容	授業形態
1・2	お茶会を体験しよう！	全体・個人
3	日本の生活文化の継承・発信	全体・個人
4	留学生に日本の衣食住の生活文化の良さを紹介しよう！	ジグソー学習
5・6	プレゼンテーション資料作成	グループ
7	プレゼンテーション（学級発表会）	全体・個人
8	プレゼンテーション（学年発表会）	全体・個人
9	リフレクション	全体・個人

(5) 実践内容

① お茶会を体験しよう！（第1、2時）

日本の伝統文化の茶道が、生徒の生活の工夫につながっていくよう授業について茶道の先生方と検討を重ねた。前半は歴史、所作、道具について、後半は実際のお茶会を目の前で拝見し実践に入った（図6）。生徒全員が亭主、客、お菓子お運びの3役を体験できるよ

う3グループに分かれ活動を行った（図7、図8、図9、図10）。



図6 お茶会を体験しようの授業の様子



図7 亭主役の生徒達がお茶を点てている様子



図8 お招きした先生にお菓子を運んでいる様子



図9 和やかな雰囲気でお菓子を頂いている様子



図10 亭主役の生徒がお茶を運んでいる様子

A 今日初めてのお茶会を体験して、1つ1つの行動にいろいろなやり方や礼儀があり、ずっと続いてきたことを知ってビックリしました。お茶は今まで続いてきたから、これからも続けていくべきだと思いました。

B ペットボトルのお茶を飲む時は、なんとも思っていなかったけど、本当のお茶は丁寧にして人を思う気持ちをもって飲むことがわかりました。たくさん覚えな
いといけないこともあるけどお茶会をよくするためには必要なことだと思った。

C 季節によってお花やお菓子が違うことを知りました。今日は紅葉のお菓子だったので、夏はどんなお菓子になるのか知りたい。見てみたいと思いました。

生徒のコメントから、A は所作一つ一つに注目していたことが分かる。B は生活事象の見方・考え方を理解し、たくさん覚えることがあるが、お茶会をよくするためには必要と理解できたという記述となっている。C は季節によってお花やお菓子が違うといことに気づき、夏のお菓子への興味を高め、考えを広げようとしている記述となっており生活事象の見方・考え方を理解させることができた実践となった。

② 生活文化の継承・発信（第3時）

前時のお茶会の体験を振り返り、パフォーマンス課題を提示し、これからの学習への見通しを持たせた。

③ 留学生に日本の衣食住の生活文化の良さを紹介しよう！（第4時）

知識構成型ジグソー学習で日本の伝統的な衣食住の生活文化の良さについて、エキスパート資料をもとに班で話し合い考えを深めた(図 11)。



図 11 知識構成型ジグソー学習の様子

④ プレゼンテーション資料作成（第5、6時）

毎回の授業の中で話し合い活動・意見交流を取り入れている。本題材は、生活文化の継承・発信ということ

で、パワーポイントを発信の道具として、活用することにした。ジグソー班でまとめた考えをもとに、インターネットで情報を集め、考えを深めていった。日本文化の良さを留学生に紹介するプレゼンテーション資料作成を通して、「日本の生活文化の良さ」「受け継がれてきている理由」についてグループで、情報を吟味し作品を作っていく生徒たちの姿が見られた。作成を家庭科で2時間、技術科で1時間行った。技術科と連携しプレゼンテーション資料作成に取り組んだことにより、和を連想させる曲を取り入れた班など、アイデアを出し合いパワーポイント活用の技術も高まった。

⑤ プレゼンテーション学級発表会（第7時）

全10グループ発表し、学級代表の2グループを選出した。各グループのプレゼンテーションの内容、発表方法、作品の出来ばえを観点に沿って批判的に評価しながら真剣に発表会に参加する生徒の姿が見られた。

⑥ プレゼンテーション学年発表会（第8時）

各クラスから選出されたグループの発表は、内容も充実しており、自分たちの班では気づかなかった考えを、発表会を通して知ることができた。「衣食住の共通点を探しマナーが大事ということ伝えていて、もっと考えていくといろんな発見があると思った。」という生徒の気づきや、「今まで、日本文化って地味とっていたけど、自分が主役ではなく相手のことや周りや自然との調和を考えているんだと知り見方が変わりました。」他の班の発表を通して、日本文化について多面的・多角に捉えることができ、新たな視点や、考えが生まれるきっかけとなる機会となった(図 12)。



図 12 プレゼンテーション学年発表会の様子

⑦ リフレクション（第9時）

これまでの学習を振り返り、OPPシートを記入し、完成させた。学習前後の比較を通して、できるようになったこと、学びの成長を実感させた。

題材全体を振り返ることを通して、生活文化に関する新たな問いや、興味が高まった生徒も多く、次の学びに向けた主体的な態度をはぐくむことができた。

(6) 授業実践の考察

① 実践を踏まえた授業の改善

知識構成型ジグソー学習のエキスパート活動では、短時間で資料から情報を整理し、衣食住それぞれの良さを見つけ出さなければならない。生徒達の活動の様子から良さを見つけ出せている生徒と、見つけ出せていない生徒がおり、見つけ出せていない生徒に手立てを講じる必要性を感じた。そこで、滋賀大学教育学部附属中学校が開発した思考ツールフラワーマップ¹⁴をエキスパート活動で活用することにした。時間内にこれだけは見つけ出して欲しい視点のキーワードを教師が提示し、生徒は提示されたキーワードに関連した生活文化の良さをエキスパート資料から探し、花びらの中に記入していく。楽しみながら資料から情報を整理し、フラワーマップに書き込んでいく生徒の姿が見られた。また、キーワードを提示していない空欄の花びらを設けることで、情報をつなげ自身の考えを自由に書き込むことができるようにアレンジした(図13)。

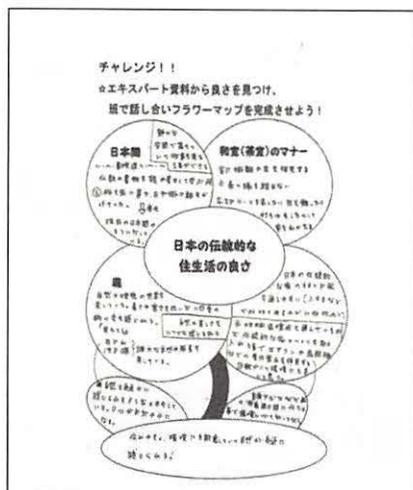


図13 フラワーマップ(生徒ワークシート)

フラワーマップをエキスパート活動で取り入れたことにより、生徒一人ひとりの思考の深まり、グループ内の思考の深まりをみとることができ、学習がスムーズに進むよう支援することができた。

② 生徒の学習の評価

(ア) 生徒の変容のみとり

OPPシート(図5)⁸を活用したことで、生徒自身も学習前後の考えを比較し、学びの深まりを実感できたことが、生徒の記述よりみとれる。

図5は、表面は学習の履歴が記述できるようになっており、生徒自身が考えた授業のタイトル、大切だと思ったことを記述していく。OPPシートの「学習前と学習後であなたの考えはどのように変わりましたか?」という問いから生徒の変容を見ていく。

学習前は、日本は文化を大切にしている国だと思っていましたが、そうではないかもしれないと思いました。

昔から受け継がれてきている文化を学ぶうち、その多くが失われてきていると知りました。今、日本の伝統的な住居に暮らしている人はほとんどいません。先祖や神様、家族のためであった行事もその意味を理解していない人が、増えてきていると思います。このまま失われていくと、とても残念なことだと思うので、私たちが積極的にその知識を学び、伝えていくべきだと思いました。(生徒Tの記述)

生徒Tの記述から学習前は、日本は文化を大切にしている国だと思っていたが、学習を通して日本文化が失われつつある現実を知り、継承していくことの大切さに気づくことができたと推察できる。

学習前は、昔からある文化だから大切にしようとしているだけだと思っていたけど、受け継いでいこうとしているのには理由があることが分かった。住生活では、これまでは涼しくするためにクーラーや扇風機を使えばいいと思っていたが、窓を大きくすることで、風通しがよく涼しさにつながると知った。窓を開け風通しをよくしていきたい。日本文化は見た目の美しさだけでなく、昔の人が生きていくためや、快適に生活できるように考えられた文化だと思う。(生徒Rの記述)

生徒Rの記述からは、これまで、日本文化について表面的な部分での理解にとどまっていたが、学習を通して快適に生活できるように考えられた文化であるという考えを持ち、生活へつなげていると推察できる。

学習前は、なぜ外国から高い評価を得ているのか、日本文化の具体的な良さが、何なのかが分からなかったけど、学習を通して分かるようになりました。例えば衣生活では色や柄で四季を表現します。食生活では一汁三菜で栄養バランスが良く、色どりや食材で季節を感じることができます。住生活では、広い空間を作ったり、庭の美しい自然が魅力的です。また、日本文化は地味だと思っていましたが、「おもてなしの心」で、自分が主役ではなく周りを引き立てるという考えがあることも知りました。日本文化は、見られなくなってきているものもあるので、日々の生活の中で少しでも取り入れ、継承していくことは大切だと思います。(生徒Hの記述)

生徒 H は、学習を通して得た日本の衣食住の生活文化の良さを、自分の考えを入れ具体的に表現できている。これまでは、日本文化を地味だと思っていたが、自分が主役ではなく周りを引き立てるという「おもてなしの心」と結び付け、考えることができたと推察できる。

学習前はほとんどの生徒が、日本の伝統文化とは、自分達の生活とかけ離れたところにあると考えていたことが OPP シートの記述からみとれた。題材を通して自分達の生活の中にあると気づくことができ、日々の生活を大切にしていこうという心情を芽生えさせることができた。以上のことから、目指す生徒像の一つである「日本の生活文化の良さを多面的・多角的に捉え、気づくことができる生徒」に迫れたと考える。

(イ) よりよい生活を目指し、主体的に学び、生活を工夫し創造できる生徒のみとり

「題材で得た知識や考え方を実生活で、どのように生かすことができましたか？」という問いのみとり。

おばちゃんの家に行って、和室のたたみの香りや、自然を感じたり、お茶を出す時には相手への思いやりの心を持って出したりした。また、衣では四季の変化を感じられるような洋服を着たりすることができた。
(生徒 M の記述)

生徒 M の記述から本題材を通して学んだことを、生かし自分なりに工夫し、生活に取り入れることができていることがみとれる。この時点では、中学での衣生活、住生活の技能・技術に関する学習はスタートしていない。本題材後に衣生活の学習がスタートした。学習前に知りたいことや問いを持っており、衣生活の学習に対する主体的な態度をはぐくむ学びとなった。

自分で実際に日常生活の中で活用していくことが「継承」だと思いました。「KEN に伝えよう」と考えた時に最初、何をどうやって伝えればよいか分からなかったけど、今は自分の生活に取り入れる事で、伝えることができると思います。「ムーチャー」や「サーターアンダギー」などの沖縄の文化を伝えていきたいです。家族や近所の和食の先生に、家庭料理を教えてもらったりしています。
(生徒 K の記述)

生徒 K は、日常生活で活用していくことが、「継承」ということに気づき、自分の生活を見つめ家庭・地域へとつなげ考え行動することができたと推察できる。

ほとんどの生徒が、題材で得た知識や考え方を、「実生活で生かすことができた」と具体的に記述できていた。

③授業デザインの振り返り

本実践は、「様々な生活事象について他の生活事象と関連付け、批判的に検討し、総合的に考察する力」の育成を丁寧に取り組んでいくことで、本教科の研究テーマ「学びをつなげよりよい生活を創造する生徒の育成」の実現に迫れるものと考えた。そして、生活事象について捉える場面では、表面的な部分や、主だった部分での解釈や知識に頼りがちであった生徒達に、茶道の体験を軸にして、生活事象の背景や、他の生活事象との関連付けができるよう工夫した授業提案である。「伝統文化の継承」について批判的に検討する場面が「①グループ内での話し合い（第4時）」「インターネットの情報の吟味・発表内容の吟味（第5、6時）」「他のグループの発表を聞き自分の考えを構築する（第7、8時）」と3度あった。その中で生活文化の継承について総合的に考察し、生徒一人ひとりが生活文化を多面的・多角的に捉え、継承していくことの大切さに気づくことができたと言える。また、伝統文化の継承の担い手は、自分達自身であることに気づき、失われつつある文化もあるので、積極的に生活の中に取り入れていこうとする主体的な姿もみとれた。

家庭科の目標は学んだことを家庭での実践で生かすことである。先に挙げた「題材で得た知識や考え方を実生活で、どのように生かすことができましたか？」という問いで、ほとんどの生徒が本題材での学びを生活に生かしていると具体的な例を挙げて記述できていた。その一つ目の理由として、批判的に検討する場を3度設けたことにより、生活文化の継承について深く考えることにつながり、総合的に考察し「日本文化を自分たちの生活に生かし受け継いでいかなければ失われていく」という現実を理解し、考えを深め実践へつなげたと考える。また、学びが家庭での実践につながったもう二つ目の理由は、OPP シートの活用とパフォーマンス課題を設定したことで、生徒達に題材のゴールを毎時間、確認させることができたことが挙げられる。以上のことから、本教科の研究テーマ「学びをつなげよりよい生活を創造する生徒の育成」の実現に迫れた授業デザインであったと言える。

カリキュラム・マネジメントの面から見ていく。第2学年の日本文化に関連する学習内容(図14)、社会、

国語で学んだ知識を家庭科へとつなげ理解を深め、京都への修学旅行で日本文化に直接触れ確かめることで、より深い学びとなったことが教科間でも確認できた。

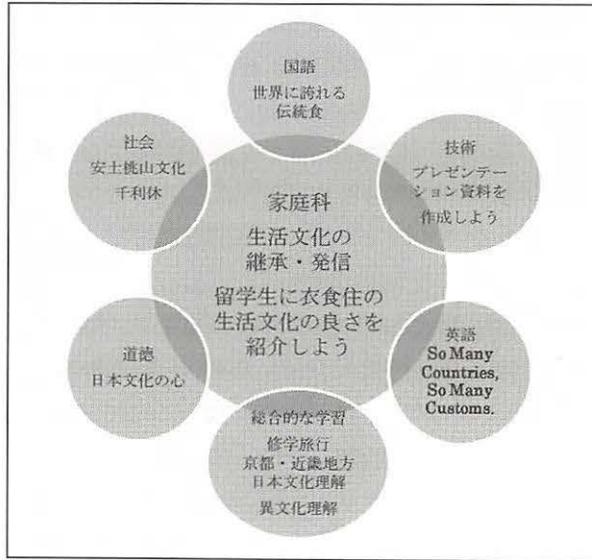


図 14 第 2 学年の日本文化に関連する学習内容

VI 成果と課題

1 成果

- ・アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた生活文化の継承・発信の授業デザインを実践することができた。
- ・OPPA、パフォーマンス課題を取り入れたことで、題材全体の見通しを生徒に持たせることができた。また OPP シートで毎回の学びのプロセスをメタ認知することで、学びが深まり、実生活における実践へとつなげることができた。
- ・家庭科で取り組む茶道の教材化を、茶道の先生方と協働し行うことができた。茶道を通して生活文化に関する新たな視点、気づきを生徒一人ひとりに持たせることができ、生活事象を多面的・多角的に捉えることにつながった。
- ・昨年度に引き続き、知識構成型ジグソー法のエキスパート資料の精選、授業デザインの検討を公立の家庭科教諭と協働で行うことができた。

2 課題

- ・本題材は新学習指導要領（平成 29 年告示）¹⁵「B 衣食住の生活」での生活文化の継承・発信についてのアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた授業提案である。生活事象について多面的・多角的に捉え、

生活文化について理解を深め、自分の考えを表現できるようになったが、9 時間かけることは躊躇される。カリキュラム・マネジメントの面から授業デザインの再検討をし、指導計画への位置づけを考えていきたい。

- ・OPPA についての研究を深め、よりよい評価へつなげていく。
- ・パフォーマンス評価・課題を取り入れた題材を各学年で行えるよう研究を深めていく。

引用文献・参考文献

- (1) 文部科学省『平成 27 年 11 月 30 日教育課程部会家庭、技術・家庭ワーキンググループ資料 10-1』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm)、2016.9.13 取得
- (2) 前掲 (1)
- (3) 前掲 (1)
- (4) 文部科学省『平成 28 年 3 月 11 日教育課程部会家庭、技術・家庭ワーキンググループ資料 9』
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/065/siryu/1369020.htm) 2016.8.24 取得
- (5) 裏千家今日庵監修・制作・発行『はじめての茶道』(2017)
- (6) 前掲 (5)
- (7) 前掲 (5)
- (8) 前掲 (5)
- (9) P. グリフィン B. マクゴー E. ケア編
三宅ほなみ監訳『21 世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち』北大路書房 (2015)
- (10) 三宅ほなみ 東京大学 CoREF 河合塾編「協調学習とは 対話を通して理解を深めるアクティブラーニング型授業」北大路書房 (2016)
- (11) 琉球大学教育学部附属中学校紀要 28 集 (2015)
- (12) 堀哲夫著 東洋館『一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』(2013)
- (13) 西岡加名恵編著 明治図書『アクティブ・ラーニングをどう充実させるか 資質能力を育てるパフォーマンス評価』(2016)
- (14) 田村学・黒上晴夫著 小学館『こうすれば考える力がつく！中学校 思考ツール』(2016)
- (15) 文部科学省『中学校学習指導要領解説 技術・家庭科編』(2018)